３つの定例活動

みなさまの参加を
お待ちしております

小原本陣の森

第１日曜日

知足の森

第１日曜日

相模湖・嵐山の森

第３日曜日

News Letter

NPO法人緑のダム北相模
midorinodam.jp

【定例活動報告】小原本陣の森

小原地区への活動拠点移行

　昨年来、２０年余り継続して活動を続けてきた嵐山・若柳地区から小原地区へ活動拠点を変更すべく、撤収作業を続けてきました。皆さんのご協力により倉庫、仮設トイレ等の解体・撤去も目途がつきましたが、「緑のダム北相模」は約束をキチンと守ってくれたといわれるよう、手を抜かずもうひと頑張りをお願いします。また、この間、小原地区の「小原宿活性化推進会議」のメンバーとも数度にわたり協議の場を設け、緑のダムの活動理念、具体的活動内容等を説明し、森の整備に加え、我々の活動の一環に小原宿活性化のサポートを行う可能性を探ってきました。協議の中で、我々は

[1]　　サポート活動は活性化推進会議から緑のダムへの依頼が前提であること

緑のダム北相模は相模原市内で活動する森林ボランティアです。急がず、無理せず、楽しく、休まず、ボチボチと・・。

[2]　　我々の活動は、原則月２回(第１、第３日曜日)の定例活動と長福寺の森(若者の森づくり/宮村チーム)の無償ボランティアであること
[3]　　従って、我々のサポート活動には自ずと限界があること
[4]　　小原地区での活動をするための拠点（集会場所、倉庫、駐車場）が必要となること
等を説明してきましたが、意図するところは理解していただけたものと思います。現時点で、集会場所、倉庫・駐車場の確保等については、具体的な方向も見えており、問題はないと思います。なお、緑のダムとしては、従来から、孫山の登山道整備、本陣祭り、ライトアップ等小原地区とのかかわりはもってきましたが、先方は我々に対し、里山としての小原地区整備にも今まで以上に力を貸して欲しいという意向を持っています。両者の話し合いの中では、この先１年間のスケジュールをどのように調整するかということに加え、中期的な目標として、小原の郷の環境整備、里山周遊コース、孫山の景観整備等、更に、長期的な目標として、小原の歴史的文化遺産保全、甲州古道の整備等も視野に入れた話も出ています。
　嵐山では、少数の山主さんのご厚意の中、限られたエリアの活動がメインとなっていましたが、小原地区では小原本陣の森、小原の郷、里山景観コース、小原古民家街並み等を対象とし、地元と多面的な関わりを持ちつつ幅広い活動をすることから、地域活性化への貢献が実感できるのではないかと思っています。

当面の活動方針としては、小原地区の年間スケジュールに対して、緑のダムとして、どの分野にどのような体制で対応できるかを検討することになります。また、中長期的な課題につきましては、実績を積み上げ時間をかけながら展開をはかっていくつもりでおります。皆さんのご協力をお願いいたします。

川田　晃（本会、理事長代行）

【定例活動報告】相模湖・嵐山の森

　冬の間は嵐山は下草の刈り込みもなく、花畑の一角に積み重ねてあった伐採後の廃材の片付けも終わっていたので、花畑班（といっても参加は薄井、岡田の２名とリーダーの丸茂さん）は木工小屋の解体に参加。今回は棟梁の長谷川さんも、いつもエネルギッシュな小林理事もいない中、骨組みだけとなった小屋の解体に挑みました。木工・森林整備班を中心に１０人ほどでの作業でした。
　骨組みだけとはいえ、さすがは伝統工法に則って丹念に組み立てられた構造。台座も棟木もしっかりと貫や楔で固定されていて、一辺を外してもそれぞれに自立しているほどに頑丈。倒す方向を決めて、その下を片付け、ロープをかけて引っ張りながらその側面の柱ごと倒すことに。
柱と棟木を固定する貫や楔は適当な長さの材を挟んで油圧ジャッキで棟木ごと持ち上げて力任せに抜き挙げる作業。
　万一、作業している人の方に倒れれば、怪我も危ぶまれるため慎重な作業でした。こうして、全ての構造材を倒してから地上で解体を繰り返し、柱を一カ所に集め、黙々と釘を抜いてかたづける部隊もいて、思ったよりも順調に、皆、怪我もなく作業を終えることができました。

　花畑班はどちらかというと、構成員は力仕事には向かない高齢者で、いつもは坦々とすすめる作業が多いのですが、久しぶりの力仕事でした。森林作業はたまにはこうした目に見える成果の伴う大仕事も楽しいもの、と身体中の筋肉の悲鳴に耐えながら、満足感にひたることができました。

岡田　陽一（本会、会員）

地球環境部は都立入試や定期試験前ということで中高生の参加がなかったため、私個人はフォレストクラスの材の搬出のお手伝い。と言っても材そのものは地球環境部が切ったものであるので、お手伝いは当然のことです。詳細は滝澤さんの報告に任せるとして、この材が今後どのようになるかについてご紹介したいと思います。第１弾の材はすでに地元のMORIMOを通して製材所へ運ばれています。軽トラ１杯分を土場に運び、製材後に回収、現在は私の職場のある東京学芸大学でさらに乾燥を続けています。これまで中学生にはまな板などを作ってもらい各自で使ってもらっていました。今回はさらに発展させ、デスクラックを作ってもらおうと考えています。ホームセンターで脚だけ購入して、製材の仕上げ後各自で取り付けてもらいます。ちなみに脚を長めのものにすればあっという間にベンチに。これも私の職場の理科実験室で試験的に使っており、大学の先生方や授業見学の保護者の方が当たり前のように座っていただいており、安全性の確認も済んでおります。３月中には木工大会を予定しております。

宮村　連理（本会、副代表理事）

桜井尚武の森のコラム

「コナラ(*Quercus serrata*)とクヌギ (*Quercus acutissima*)」

図1．コナラの堅果と葉
20170923石老山

図2．クヌギの堅果と葉
20080902藤沢

図3．萌芽が成長した株立ち林
20100205秦野

図4．左コナラ、右クヌギの樹皮
20190202秦野

人家に近い山や田舎の家周り（里地里山）に植えられ、また雑木林に一般的な落葉広葉樹です。どちらもブナ科コナラ属ですからQuercus。属は同じでも更にコナラ節とクヌギ節に細分されます。コナラ節のコナラの核果は受精したその年に成熟するの対しクヌギ節のクヌギは翌年成熟するという違いがあります。葉の形がかなり違うので区別は容易でしょう（図1, 2）。

薪炭材として燃料革命以前（1960年代以前）には一般家庭の煮炊きや暖房などの熱源として大変重要な樹木でした。林学の実習で雑木林の資源調査をした時に、コナラ・クヌギ・カシの大きさは樹種別に野帳に記載し、それ以外の雑木（ザツ）とは区別すると教わりました。里山の雑木林では根元から何本にも分かれて叢生（そうせい）して測定記録の面倒なものでもありました。しかし、薪炭材として細いうちに収穫することがなくなった昨今では、大きくなった株立ちのものが目立つようになりました（図3）。山裾に植えられるクヌギと中腹以上に植えられるコナラは樹皮の違いで解ります。白っぽい表面が平らな多くの筋のあるのがコナラ、濃いこげ茶で表面に不揃いの稜が目立つ筋のあるのがクヌギです（図4）。

薪炭として使われなくなった後でも両種はシイタケ榾木（ほだぎ）として優良なシイタケを育てるのに重用されました。最近ではおが粉培地でハウス栽培されたシイタケが広く出回るようになりましたが、原木シイタケでなくちゃあ食味や食感が違うという榾木への根強い人気があります。

桜井　尚武（本会、会員）

【若者の森づくり】ForesTo Class

嵐山の木材搬出！2回目の正直！

先月に続き嵐山の材搬出について取り組みました。“単線循環式軽架線”と林業界では呼ばれている手法について朝から段取りを進めていきました。

前回はワイヤーが絡まないように装置に巻きつけていくのに時間がかかってしまったので動力装置のパーツを外し、元々のワイヤーの切れ端を除去することでよじれを防ぎました。

それでも動かしていくうちに片方にワイヤーが寄っていき、二重に乗っかっていくのでそこでも時間がかかってしまいました。結局このワイヤーが最終的に悪さすることに…

手順としては以下の通り。

[1]スリングと滑車をワイヤーを通す支点となる木に取り付ける。

[2]ワイヤーを張り巡らせる。

[3]ワイヤーを動力装置に巻きつける。

[4]チルホールなどを使いワイヤーのテンションをかけていく。

[5]ワイヤーどうしを結合する。

ワイヤーの結合においては、とても複雑で二藤さんがやっているのを見守るしかありませんでした。ワイヤーは3つ編み状になっているのでそれをほどき、それぞれの端と端を5回ずつ巻きつけていく。これがとても大変そうで、またまた時間がかかりました。全ての手順を完了し、動力を動かした時には15時を回ってしまいました。アクセルとブレーキの調子も良くなかったですがやっとの思いで稼動。

ワイヤーが動いた！と思った数秒後に例のごとくテンションのかかったワイヤーが回転していくはすが、ずれていき絡まってしまいました。

原因はワイヤーを巻きすぎてしまったことと、ワイヤーの巻き口の入り口と出口が斜めになってしまった点です。

来月は3回目の正直ということで、その問題を解決し、準備にゆとりを持つために2日間で取り組んでいきます。

4月以降の取り組みとしては、地域の協議会とすり合わせさせていただきながら入山からの作業道を着手していきたいと思います。

滝澤　康至（ForesTo Class）

【若者の森づくり】Foresto Nova

今回で最後の投稿となります。私はForest Nova☆に入部したことで学んだことは人と何か成し遂げることは面白いということです。そもそも私は動植物が好きでそれに関わる活動をしていると勧誘のメールに書かれていたからこのサークルに入部しました。しかし実際の活動はスギ、ヒノキの伐木や林内整理、子ども向けイベントへの出展がメインで動植物の調査や巣箱作りなどの活動はあまり行いませんでした。正直な感想を言いますとあまり面白いなと思って活動していませんでした。先輩たちに推薦してもらって小原大名行列に役者として出てみたり、他のサークルのように旅行にも行ってみたのですが、その時だけの充実感で長期的に続くものでは有りませんでした。転機となったのは私が３年生となってからでした。釜谷先輩が卒業し、私と２年生の計４人だけになってしまってからです。

まず、新一年生に入部してもらい、メンバーを増やそうとしましたが定着してくれず失敗しました。そのため、嵐山定例活動にどうしてもメンバーが足りなくなってしまい行くことも増えていきました。しかし、この時の活動は前と違ってつまらなくありませんでした。恐らく人に指示を受けて行うのと違い、自分たちで考えて何かを行うとい

うことは難しい反面、とてもやりがいがあったのだと思います。イベントの際にも自分たちで一から考えてやると成功した場合はとても嬉しかったですし、失敗しても次に繋げようとプラスな気持ちで行うことも出来ました。また、初めてこの年は学祭にも出店することが出来ました。売れ残りで肉まん400個はすさまじく誤算でしたが、今となってはいい思い出です。また、この時後輩たちが自分たちでスタンプを作ったり、木彫りや焦がした木を利用して新しいノバの商品を開発して大きく刺激をもらいました。去年は新しく入った一年生たちが、自分たちでスタンプラリーを企画して、スタンプを自分で作っていたが衝撃的でした。今後はこれらの活動に関われなくなると思うと少し寂しいですが、残ったメンバーたちが新しいメンバーとともに立派に果たしてくれると思います。

また、色々な方々にお世話になりました。緑のダムや小原の方々、様々なイベントのスタッフさんや原田先生、そしてノバのメンバーたち。いろんな人達がノバの活動を支えてくれました。本当に感謝してます。本当にありがとうございました。

望月　健一（Forest Nova）

【若者の森づくり】地球環境部

地球環境部との非日常（３年目）

二中に入学してから、仮入部で、この部活の活動内容の説明を受けた。まず思ったのは、変な部活だということだ。森林保護のボランティアをしたり、学校にビオトープを作ったり、芝刈りしたりする部活なんて聞いたこともない。あと、先輩方も個性的な人が多そうだ。その前は別の部活に入ろうと考えていたが、こちらの方が面白そうな気がした。それで、地球環境部に入部を決めた。

学校では、ビオトープでの作業が多かった。生えてきた雑草を刈る。田んぼやその水路をつくるため、ひたすら地面を掘る。耕す。稲を植える。収穫する。人工の池に水草を植えたり、メダカを放したりする。たまにそばにある芝生の芝刈り、などなど。放課後そのまま国立天文台へ行って竹林の整備をすることもあった。特に大変な季節は、夏だ。刃物を使うときは、けが防止のため長袖だし、蚊もビオトープ周りに大量発生する。暑いわ蚊がいるわで本当につらい。冬も、激しい運動をするわけではないから、野外での作業は寒くて仕方がない。校周を走って暑くなる運動部がうらやましいと思ったほどに。また、ある時から池の水面にボウフラらしき虫がたくさんいたものの、鳥に食べられたのか、いつの間にかいなくなっているということがあった。少しずつ本物の自然に近くなっているのがわかって、感動した。

森での活動も、私にとってはとても刺激的だった。一番達成感があるのは、やはり大きな木を間伐したときだ。まず受け口をつくるだけでも交代で、時間がかかる。いよいよ切り倒すときに、別の木に引っかかりそうであれば、ロープやハーネスをつけてみんなで引っ張らないといけない。これもかなり力がいる。うまく倒れた時、地面に落ちた地響きのような音を聞いた爽快感はものすごい。しかしこれで終わりではない。無事切り倒した後は、数メートルずつ木を切って丸太にする。その重い丸太を所定の位置に運ぶ必要があって、斜面であればなお大変だ。ここまでくるとただの肉体労働である。

あとは、小菅村での合宿。多摩川の源流をさかのぼったり、花火したりお楽しみイベントも満載・・・なのだが、大半は強化練習で占められている。自分で木を一本間伐するので、実力が付く

のは間違いなし。身体を動かすイベントが多いので、夜は泥のように寝る。夜、村を車で移動して、ウリボウを至近距離で見たこともある。自然との距離がとても近くて、非日常的な数日間だった。

地球環境部、特に森での活動では、年齢も性別も違う人たちが集まって一緒に作業するから、当然知らない人とも話をする。いつも思うのは、いろいろな人がいるなあということだ。その人の体験談などを聞くのは、本当に飽きない。そこから自分の考え方が少し変わることもある。この活動は、私にとって学びの場でも、出会いの場でもあるのだ。三年間を振り返ると、林業や環境保護の中身をのぞき見て、普通では経験できないようなことをしただけでなく、自分の世界が広がったことを実感する。これからも、この刺激的な活動に参加して、自分がどう影響を受けるのが楽しみだ。

濱田　真帆（三鷹市立第二中学校３年）

また、これまでの活動研究をまとめた２本の論文（発表）を計画しています。１本目は東京学芸大学環境教育研究センターの研究紀要に私とこの２年間森に関わった中学生で論文投稿しています。主な内容は、東海大高輪台高校SSHでの活動を含めて、中高生でも実感が持てる森林整備活動の評価法の研究です。天空写真を使った空隙率の調査や桜井先生、小柳先生にご指導いただいての植生調査の結果を中学生がどのように解釈し、森林整備活動の成果を実感できるか、その評価法に関する研究です。３月中には発刊されると思いますのでまたご紹介します。

さらに、同様に2005年より活動をしてきました望星の森も一つの区切りを迎えます。望星の森についてはかなりレアな斜面であることから引き続き緑のダム、地球環境部で管理をさせていただく予定です。これまでの育樹法についての検討を３月の森林学会にて高校生ポスター発表という形で発表します。これは緑のダムに中１から６年間通い、現在早稲田大学高等学院３年生２名による発表です。こちらも発表次第、ご紹介、ご報告したいと思います。

宮村　連理（本会、副理事長）

NPO法人
緑のダム北相模

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模

現地事務局：〒252-0172　相模原市緑区与瀬本町12　かどや食堂内

発行人：NPO緑のダム北相模

支援団体：セブン-イレブン記念財団
積水ハウスマッチングプログラム、国土緑化推進機構
パタゴニア環境助成

協働団体：神奈川県、相模原市、麻布大学、マルモ出版、
東京学芸大学環境教育研究センター、
（社）さがみ湖 森・モノづくり研究所、ウッドバンク㈱

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前に集合です。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食、第３日曜は汁物が提供されますので自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。